

# 学校教育における ジェンダー視点の重要性

ジェンダー平等は、SDGsの5番目の目標として挙げられている世界共通の目標です。しかし、日本のジェンダーギャップ指数は、146か国中116位(「The Global Gender Gap Report 2022」世界経済フォーラム)で、世界標準にも届いていません。そこで、ジェンダーと教育をご専門とされている片岡洋子先生をお招きし、土田雄一先生、瀬戸山博子先生と座談会を実施、2号連続の特別企画でお届けします。後編となる今号では、道徳教育とジェンダーとの関係についてお話しいただきます。



千葉大学  
名誉教授  
片岡 洋子



千葉大学  
教授  
土田 雄一



倉敷市立  
倉敷南小学校教諭  
瀬戸山 博子

前編では、学校教育におけるジェンダー視点の重要性についてお話しいただきました。

## 学校教育におけるジェンダー視点の重要性

### 前編の 振り返り

- ① 世界は多様で、自由に生きられるということを教える必要がある!
- ② 男女の区別をなくして同じにするのではなく、一人ひとりが多様な選択ができる状態にする!
- ③ 指導の際に、「性別」というカテゴリーを便利に活用していないか見直してみる!

前編は  
こちら



## 道徳教育とジェンダー

**土田**：学校教育を支え、いろいろな考え方や生き方のベースとなる道徳教育ですが、ジェンダーとどのような関係にあるのか見直していきたいと思っています。

**片岡**：たとえば道徳の教材に出てくる「家族」は、「両親そろって子どもが二人いる」「学校から帰ってくると母親が出迎えてくれる」など、定番の家族を描いていることが多いですが、そういった家族は多くないかもしれません。実際には、家族の多様性が進行しているにもかかわらず、「こうあるべき家族」という隠れたカリキュラムとして、子どもたちに伝わってしまうことがあります。ジェンダー平等の考え方から家族の多様性を認め合えるよう、教員が自覚的に授業を展開することが重要です。

**瀬戸山**：道徳教育としては、「家族の形は多様化しているけれど、一緒に思い合って幸せを求め合って暮ら

す、それが家族だ」という考え方を否定されるのは困りますよね。

**土田**：多様な家族があるけれど、その中での幸せって何だろう、あるいは家族って何だろう、ということを考えていくことがこれからの「家族愛」になるんじゃないかと思いますね。決まりきったモデルを「こうあらねばならない」と押しつける刷り込みのような道徳教育ではなく、それぞれの幸せを考えられるような視点が必要になるのではないのでしょうか。

## 内容項目とジェンダー

**土田**：道徳には「友情、信頼」という内容項目があり、高学年では「異性についての理解」が出てきますが、それについてはいかがでしょうか。

**瀬戸山**：思春期に入ると、異性に対して「男子はこう」「女子はこう」と決めつけて話している場面が見られ

ます。これには、教員がこれまでにつくってきた空気が影響することもあると思うので、高学年に至るまでの教員の感覚や意識を変えることが大切です。異性として理解するのではなく一人ひとり理解しようという意識や、いろいろな人がいるのだということへの理解へもっていかれたらよいですね。

**土田**：男女という区分ではなく、一人ひとりを理解しながら友情を築いていく、そういう視点に変えていかなければいけないだろうということですね。

**片岡**：かつて中学校で、「図書委員の女子とサッカー部の男子がデートの約束をするけどどうまくいかな」という内容の読み物資料を使った道徳の授業をしました。そして、「この資料を読み込んで思ったことを書きなさい」という課題を出しました。すると、「図書委員の彼女とサッカー部の彼氏、この設定こそが固定化されたジェンダー観だ」「最終的に彼女が折れて謝る、女性がこういった描かれ方をされることが多い」などの意見が出ました。こうした資料そのものからジェンダー観を読み解くといった授業は、非常に興味深い結果が生まれます。

**土田**：教材の中で主人公はどうだったのかという話だけで終わらせることなく、教材をきっかけに「本質はどうか」を、みんなで吟味する批判的活動を行っていく必要がありますね。

**瀬戸山**：「国際理解」の内容項目では、受け継いできた文化と人権やジェンダー平等の価値観が相反することがあるのではないかと思います。

**片岡**：「その国の伝統文化を大切にしましょう」という考えにとどまらず、「日本と違った文化の国も、その国独自の文化をずっとつくり続けている」「伝統的な文化を大事にしながら、新しい文化をつくっている」というふうに展開できるとよいですね。たとえば、オーストラリアでは、先住民であるアボリジニを迫害していた歴史があります。しかし、政府がそれを謝罪し、過ちを歴史教育で教えた結果、現在では先住民の歴史や文化を尊重して共生社会をつくらうとしています。このような他国の歴史や文化を、教員から子どもたちに提供することにより、子どもたちは、国際理解や人との共生について深く考える機会を得られるのではないのでしょうか。

どの内容項目でも、教師がキーワードから発展させ、子どもたちと一緒に考えながら、いろいろな新しい考え方を知り、一人ひとりの人権に結びつける、という展開ができるのではないかと思います。

**土田**：道徳教育においては、誰かと比べるのではなく、一人ひとりがどのように生きるか、自分なりに評価しながらよりよい生き方を目指して考え続ける姿勢をもつことが大事になる、そういったことが象徴されるお話でした。一面的なことしか伝えられていないところが、日本の道徳教育の課題だと感じています。教科書の中にとどまらず、それをきっかけに多様な考えに触れ、自分はどうかありたいのか考える力を育む、それが道徳に課せられた役割であると思います。

## 道徳教育に期待すること

**瀬戸山**：教材はあくまでも入り口で、そこからジェンダーや性の多様性を知り、その先に自分を大切にするという考えが生まれます。道徳では、一人ひとりを大切にしていくことで社会ができていくという見方を、子どもたちに伝えられたらよいと思います。

**片岡**：子どもたちの現状に向き合える道徳教育を行うことが重要で、子どもが今何に悩んでいて、どのようなことを考えているのか話し合えるような教員の取り組みが必要だと感じています。ほかの教科とは違い、道徳では目の前の子どもの問題意識に応答するような授業展開ができると思います。

**土田**：道徳教育には、これからのジェンダー平等を考えていくうえでのベースをつくる役割があるのではないかと思います。まず相手を理解し、認め、「リスペクトする心」を育てる、それが道徳なのかなと思います。そのうえで、時には対立のある場面でも一緒にどうすればよいか考え続ける姿勢をもたせることが今の道徳教育に必要なと思います。



## まとめ

- ① 道徳教育には、ジェンダー平等を考えるうえでのベースをつくる役割がある!
- ② 教材をきっかけに多様な考えに触れ、自分はどうかありたいのか考える力を育む!

